

系 車

編集 山形村ふるさと伝承館



—一九九二年 夏—

淀ノ内遺跡の 発掘

四十四の住居跡が、四千年の眠りから醒めた。

埋もれた私達祖先の偉大な文化が、土を掘るごとに現れ、多くのことを語ってくれる。

私達の祖先は自然と調和し、皆が協力し合い、豊かなものであったのであろう。

この祖先の文化を伝え、二度と埋もれさせたくはない。

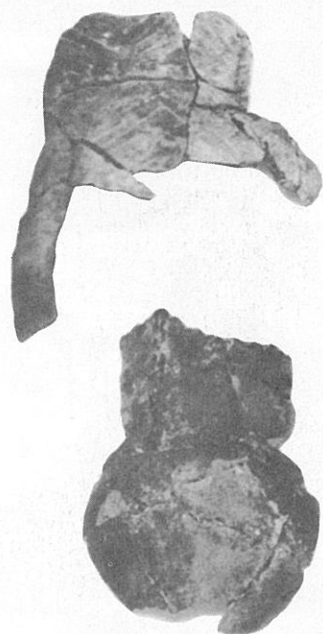
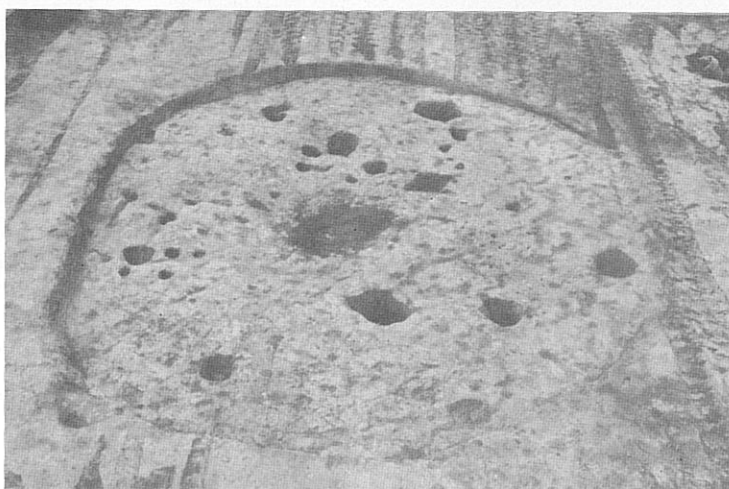
写真で見るふるさと 伝 承 館



縄文時代前期

今から約六千年前の住居跡で、中央部に炉が設けられている。他の穴は、おそらく柱をたてたものと思われる。多量の炭化物が出土したため、焼失したものと推測される。

この住居跡から出土した土器は、比較的薄いもので、内側には、指で押したあとが残っている。下の壺形の土器には、赤く酸化した鉄分を含むものが残ったまま出土した。



縄文時代 中期

縄文時代中期
の中頃の住居跡

で、やはり中央部に、石で囲んだ炉がある。内側には、雨水の侵入を防ぐための溝が掘られ、それらが柱穴を結び七角形となっている。溝の内側にある、比較的大きな穴は、ドングリ等を貯蔵した穴であろう。

この頃の土器として、下の写真にある、台付の土器が出土した。この形の土器は一点しか出土しておらず、祭り等に用いられたものである。



縄文時代中期

この住居跡は、中期の後半頃のものである。この頃になると、入口部付近に、土器を埋める習慣があらわれる。写真の下側にそれがみられ、埋甕と呼んでいる。炉は中央よりやや奥よりに設けられ、比較的深く大きいものが多い。他の穴は柱を埋めたもので、四本の柱で支えていた。そして、この住居跡にも、雨水の侵入を防ぐ溝が掘られている。



有孔罎付土器

土器の縁あたりに罎状の突起部があり、その上側に幾つかの穴があげられている。
この土器は、酒を造るのに使った酒壺ではないかといわれている。

深鉢形土器

この土器は、住居跡から出土したものではなく、穴の中に置かれるようにして出土しました。左右に把手がある。縁のあたりには、渦巻状の模様がみられ、縄文時代中期の後半によくみられる土器である。



平安時代

平安時代の住居跡も、縄文時代のような、竪穴の住居で、方形のものが多い。この頃になると、壁際にカマドが設けられるようになり、淀ノ内遺跡では、一軒しか検出することができなかった。

この頃の土器は、ロクロを用いるようになり、ときには、下の写真のように、墨で文字がかかれるものがある。また、灰を釉薬として用いた。灰釉陶器も出土した。



小型磨製石斧

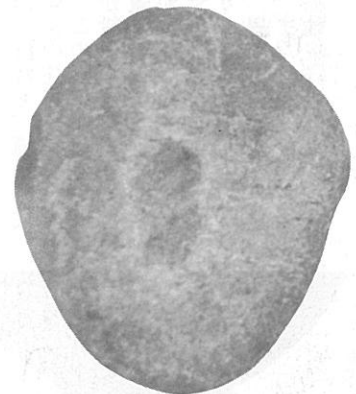
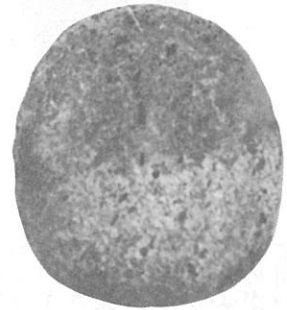
石を割り、ある程度の形にしたあとで、入念に全体を磨き刃を付けたものであるが、四cm―六cmと比較的小さい。通常の磨製石斧は、木を切る時に用いられようであるが、これとは、異なつた意味をもつものと考えられる。中には、墓と考えられる穴から出土した例もあり、呪術的な意味をもつものかもしれない。



凹石

石の一面あるいは両面に、小さなくぼみがあるもので、そのくぼみに、クルミ等をのせて割る道具、もしくは、火をおこすのに用いた道具といった両者が考えられている。

また、一部のものは、磨かれたものもあり、石皿とともに、木の実等をすりつぶし粉状にするときに用いたものがある。このことから、クルミ等を割る道具として考えるのがよいかもしれない。



石匙

これは、匙として用いたものではなく、肉や木を切ったり、削ったりしたのに使つたと考えられている。

チャート等で入念に作られたものと、砂岩等で、わりと雑に作られたものが出土している。



石棒

石を男根状に成形したもので、生活のための道具ではなく、儀式的な意味をもつものとして考えられている。淀ノ内遺跡で出土したものは、先端のみで、下半部が欠損している。比較的大型なものであつたのだろう。



遺物出土状況

淀ノ内遺跡では、四十四軒の住居跡が検出され、多くの土器や石器が出土した。それら遺物の出土状況は、様々である。完全な形のままであったり、住居内に散らばって出土したりする。遺物が、どの様に出土するかということも重要な意味を持つ場合がある。写真は、東区十号住居から出土した状況で、ほぼ完全な形のままで出土した。縄文時代中期中頃のものである。



埋 葬

西区二十九号住居（縄文時代中期後半）の出土例である。淀ノ内遺跡では、こういった埋葬が十例検出された。その中で唯一つ石がのせられていた例である。

乳児を埋葬した説と、胎盤を収納した説などが考えられているが、まだ不明な点が多い。住居の入口付近に設けられ、土器の中にある土は、後から自然に埋まったものであるため、当時、土器は空の状態であったと考えられる。

遺物出土状況

東区五号住居（縄文時代中期）の出土状況である。

多くの破片とともに、完全な形のままで出土することもあり。これらの土器は、住居の床面との間に、土が堆積しているため、この住居に住んだ人々が、使用したものとは考えにくい。ある程度時間がたってから、この地に移った人々が、捨てたものである。淀ノ内遺跡では、こういった住居跡を五軒ほど検出することができた。



村の天然記念物

村の教育委員会では村内の名木古木を大切に保護し保存するため、昨年の夏文化財調査委員会の答申に基き、その主なものを村の天然記念物に指定した。

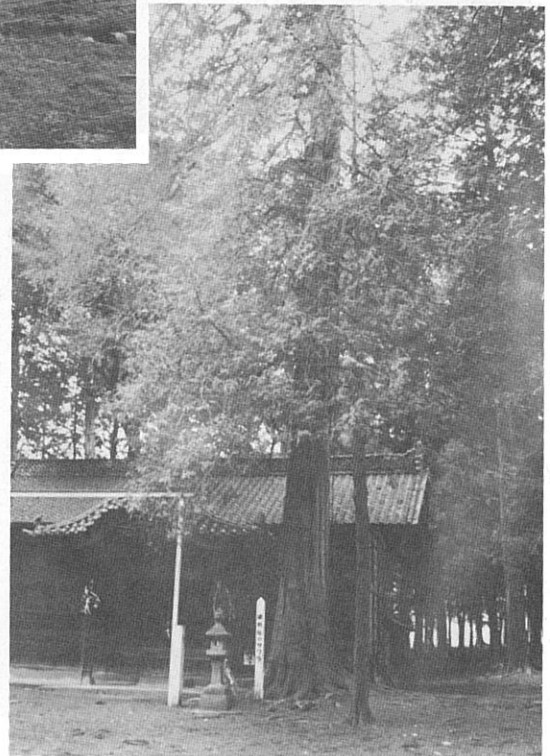
そして今年八月、それぞれの樹に標柱を建てこれを明示したので、この機会に順次それらの名木古木を紹介する。



中大池 地蔵様のアカマツ

地蔵様のアカマツ
マツ科（別名メマツ）常緑高木
樹皮は赤褐色または黄褐色老木になると亀甲状に裂ける
球果は二年目の秋に成熟して種子を出す。
胸高周囲 二〇六cm
樹 齢 推定四〇〇年

建部社のサワラ
ヒノキ科 常緑高木
葉は緑色の鱗片状でヒノキより小さく、先がとがる。裏面に白い気孔線があり、白っぽい
球果は十月頃成熟し黄褐色、ヒノキよりやや小さく、表面が盃状にくぼみ、でこぼこしている。
胸高周囲 四三〇cm
樹 齢 推定三〇〇年



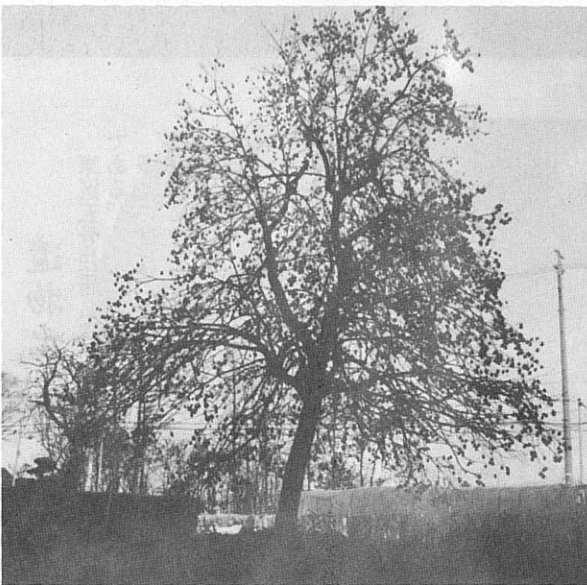
上竹田 建部社のサワラ

竹田柿

天然記念物に指定した老木古木ではないが近頃だん／＼姿を消しつつあり、今のうちに保護策を考えておきたい木に「竹田柿」がある。この実は春先まで保存がきくと古くから近隣の人たちに珍重されていた。

秋になって稲の脱穀が始まると主に小坂の山口の人たちが、この竹田柿を仕入れ、和田方面の脱穀現場へ持って行き粳と等量交換をしていたという話も聞く。六部塚に陸稲の碑がある様に、水田の少なかった当時の村の人たちにとっては、竹田柿は大事な産物だった。二〇年ほど前に、四ツ谷に竹田柿の親木というのを見に行ったことがあるが、その時はもうすっかり弱り果てており、天然記念物指定申請をあきらめてしまった。特定の老木はなくても「竹田」の名のついた柿の木を村の文化財として大切にする方策はないものか。

近頃は鳥も通わず残り柿



竹田柿